

17~18 節にはアブラハムによる「イサクの奉献」が記されています。「イサクによって祝福する」と言う神さまの約束と、「イサクを献げなさい」という神さまの命令、この矛盾した二つのことなかで、アブラハムはイサクを献げます。そして、アブラハムが、まさに手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした瞬間、主の御使いの中止命令が出て、一匹の雄羊が現れ、アブラハムはそれをイサクの代わりに焼け尽くす献げ物としました。神さまは、このように、一人子さえ惜しまなかったアブラハムの信仰を祝して、子孫の末長い繁栄を約束したというのが、イサクの奉献物語です。著者は、アブラハムはイサクが死んでも神さまは死者の中から生き返らせるに違いないと確信していた、これがアブラハムの全たき信仰であるということです。最愛の子どもを犠牲として、神さまに献げることは、古くからイスラエルでは行われていました。旧約聖書には王が自分の息子を火の中を通らせたことが度々記されています。人が最も大切にしているものを神さまに献げて、絶対服従の意思表示を行い、神さまと和解しようとするのは、ごく自然な素朴な信仰告白の宗教的態度だったのです。しかし、神さまは人を献げることは望んでいないと言うミカのような預言者もいました。創世記の著者は、神さまは人を献げることを喜ばれない、ということはこの物語で明らかにしたのです。この物語の根底には、長子を犠牲として神さまに献げるカナン宗教的風習に対して、神さまが子どもを犠牲にすることを止めさせ、代わりに動物を犠牲にするように命じた、子どもの代わりに動物を犠牲にすることを勧める意図の伝承があったと推測されるのです。この思想を受け継いだ人たちは、ヨシヤ王の時代、申命記改革を行い、人を献げるという悪習を改めました。申命記やレビ記には子どもを犠牲として献げることを禁じる律法が記されています。

ところで、パウロもアブラハムの信仰について記していますが、「イサクの奉献」には一言も触れていません。パウロは、アブラハムがサラとの間に一人の子も与えられず、二人がそのようなことが望み得ない高齢になってしまった時に、まだ実現していない神さまの言葉に全面的に信頼したことが神さまの前に正しいとされる唯一の前提なのだ、と語っています。まず、神さまの恵みの提供が先行し、アブラハムはその神さまの言葉に応答したのです。それが信仰です。パウロにとって、信仰は神さまへの信頼であり、無からの創造者、死者を復活させる方への信頼なのです。目に見えないものを信じながら、その生涯を歩んだ先人たちを思い起こす時、その一人ひとりの人生は、リアリティをもって私たち自身の今の生き方に問いかけるのです。